

基礎編課題⑩

【名前…】

2000 文字程度の文章を書きましょう。
シチュエーション「これまでの課題で書いてきたキャラクターたちがピンチに陥っているシーン」

幼き頃の自分がいた。周りの顔色ばかりを伺って、自分の意志も意見も何もない自分が成長していく。

小学生も、中学生も高校生の自分も一緒だ。何も変わらず心は幼い。そんな自分が嫌になっていく。

ぼんやりと浮かぶ自分の思い出に、律は顔を覆った。そもそもここはどこだろう。闇の中をユラユラ、ユラユラと彷徨っている感覚だけがある。体は浮いているのか。しかしそんなことはどうでもいいのだろう。だって私は――。

――あれ？

――わたシのナマえはなンダっけ？

「律！」

切羽詰まった声がして、律はハッと目を開けた。心なしか、瞳がいつもより熱い気がする。

「律！ 目を覚ましてください！」

「……輝？」

「ああ、良かった……！」

涙を浮かべ、輝は膝から崩れ落ちる。気づくと見慣れない石の天井が見えた。

「私……？」

「覚えてないんですか？」 突然この迷宮に入ったら気を失ったんですよ。どれほど心配したか……」

「迷宮……」

そうだ。ここには調査に来たんだった。

コメントの追加 [na4]: なんの調査でしょうか? キャクターの状況をもう少し説明しましょう。

コメントの追加 [na1]: どこにいるのでしょうか? 続く文章を見るに、この一文は適切ではないと思われます。
「幼いころの自分は周りの顔色ばかり伺っていた。自分の意志も意見もなにもなく、成長しても変わらない」

コメントの追加 [na3]: この「突然」は「気を失った」にかかりますが、読み方によっては「突然迷宮に入る」とも取れます。
「この迷宮に入ったら突然気を失ったんですよ」としましょう。

コメントの追加 [na2]: 前の文章と同じことの繰り返しになっています。
「心が幼いままの自分が嫌になっていく」とするといいでしょう。

コメントの追加 [na5]: 声ではなく地鳴りだと認識してしまいます。声が出た後に地鳴りがしたと描写しましょう。

律はゆっくりと体を起こす。まだ目眩がするが、状況を把握することなら出来る。周囲に人の気配はなく、ただ静かな石の神殿が広がる。ところどころにヒビがあつて今にも崩れそうだ。

「大丈夫ですか、律」

「え？」

「眠っていたとき、泣いていましたから」

そう言われ、自分の頬を撫でる。僅かだが涙の痕があり、目も些か腫れていた。

「涙……」

自分が見ていた夢を、糸が解れていくかのように思い出す。そうして思い出した。弱い自分を見た。この先に不安しかないような、そんな夢を。

「私——」

「律」

輝が律の手を握り、優しく包み込む。普段はゲームのやりすぎで冷たく、カサカサな手なのに今はとても暖かい。

「辛いときは、辛いでいいんですよ」

その言葉がしつとりと律の心に響く。律は唇を噛みしめ、何かを言おうとした時だった。

——オオオオオオオオッ！

「！」

「今のは!？」

地鳴りのような音がして、迷宮が振動で揺れる。輝は律を庇うように上に覆いかぶさった。

「律！ 怪我は！」

「ない。けど、これって」

音かとも思ったが、これは声だ。グラグラと揺れる中で、律はその声に聴覚を集中させた。

「崩れそうです……!! 律！ 立てますか！」

天井からも細かな瓦礫が落ちてきて、時間が経てばあつという間に生き埋めになりそうだ。

輝は律の腕を取った。

「立てる」

「なら良いです。走ります！」

コメントの追加 [na6]: 臨場感のある良い表現です。

輝を先頭に、二人は迷宮の出口へと向かう。光の届かない冷たい床を、二人の足音が反響した。

出口へと向かう途中、律はずっとあの声が気になっていた。叫び声、怒り、興奮、ぐちゃぐちゃな感情が入り乱れていて、聞くのも辛くなる。

そしてどうしてこんなにも寂しい気持ちになるのか。

「ねえ、輝」

「何ですか！ 話している余裕はないんで——」

「私、残る」

「え？」

輝が振り向くよりも早く、律は駆けだしていた。来た道はまだ瓦礫で塞がっていない。

「律！ 戻ってください！ 律！」

「ごめん！ でも行かなきゃ！」

「行くってどこに！」

ピシ、と天井に亀裂が入る。そして律は叫んだ。

「声のする方よ！」

刹那、天井が割れて輝の目の前に瓦礫が落ちる。退路が断たれ、亀裂は律の頭上まで広がっていく。天井は崩落の一途をたどり始めていた。

「律！ りつー！——」

輝の声に押されるように、律は走った。天井の亀裂がその後を追いかける。そして細かな瓦礫も落ち始めた。

「邪魔！」

落ちてくる瓦礫を避け、時には止まって落ちるタイミングを見計らう。小柄な体はよく小回りが利き、大した怪我もなく進むことができた。

ガラガラとうるさい石の音が響くが、律はあの声にだけ意識を集中させる。湿った空気が体にまとわりつき、汗で服はじっとりとしていた。

それでも走る。ここで止まれば後悔するぞと体が叫ぶから。

だがその時、何の前触れもなく頭上に落石が当たった。

「ツッ！」

視界が一気に歪み、二歩、三歩とよろける。生暖かい何か頬を伝い、脳に電流が走ったかのような痛みがあった。

——こんなところで、

「死んでたまるか！」

倒れ込む一歩手前で律は踏み止まり、ぐんと頭を上げた。

流されてばかりの自分にサヨナラを。誰も助けようとしなかった自分にサヨナラを。そしてこれからの私は、もう誰も見捨てない。

時間が経つのも忘れ、律はとにかく声の主を探した。似たようなフロアが多く、声の主どころか生物すら見当たらない。

「なんでよ……」

この迷宮が崩落するのは時間の問題だ。そうすれば必ず自分は生き埋めになる。

「どこにいるのよー！」

律は叫ぶ。だがそれに応えてくれる者はいなかった。